

## 目次

|   |     |
|---|-----|
| はじめに  | 1   |
| <b>第一部 歴史認識としての自然主義</b>                             |     |
| 第一章 歴史認識としての自然主義<br>——文学史の田山花袋／田山花袋の文学史——           | 9   |
| <b>第二部 〈事実〉を語る方法</b>                                |     |
| 第二章 田山花袋における三人称文体の獲得<br>——江見水蔭「十人斬」と田山花袋『重右衛門の最後』—— | 23  |
| 第三章 経験と伝聞<br>——『重右衛門の最後』と『遠野物語』における〈事実〉の語り方——       | 39  |
| 第四章 〈美文〉と〈小説〉<br>——田山花袋の〈小説〉認識について——                | 51  |
| 第五章 「無技巧」の修辞学的考察<br>——田山花袋の文体練習と修辞学の動向をめぐって——       | 64  |
| <b>第三部 〈描写〉の時代と田山花袋</b>                             |     |
| 第六章 写真から描写へ、平面から立体へ<br>——明治三十年代の写真表現と田山花袋——         | 81  |
| 第七章 〈虚子の写生から小説へ〉の意味<br>——「文章世界」の「写生と写生文」特集から——      | 103 |
| 第八章 〈書くこと〉と〈忘れること〉<br>——「蒲団」、文学者の煩悶のゆくえ——           | 118 |
| 第九章 『田舎教師』・三人称を生きたる読者<br>——ある同時代読者の読みをめぐって——        | 131 |
| <b>第四部 感傷から観照へ</b>                                  |     |
| 第十章 田舎教師の復讐<br>——『田舎教師』における自己肯定の方法——                | 144 |
| 第十一章 『縁』、方法としての〈観照〉<br>——書き直される「蒲団」、作り直される〈家〉——     | 158 |
| あとがき  | 179 |